

(2) 子供ならば、足を捉へて倒にして徐かにふるのである。  
 (3) 枕又は我が膝に假死人の腹を當て、靜かに背を撫でながら背部より壓する。  
 右のうち何れかに依りて充分に水を吐かせたる後は身體を乾きたる手拭にてよく拭ひ、秋冬の天寒き時の如きは、遠火にて體を温め然かる後に前記の第一より第六に至る活法を施すべきである。

### 第五款 墜落顛倒

高き所より落ち、又は顛倒したる爲めに人事不省に陥りたる場合は、特に甚しく外形的怪我のありや無やを検したる後に前記の活法を施すべきである。  
 なほ此の場合に於いては、必ず奥の活、即ち神傳の活を施さねばならぬ。  
 是れについて誠に面白い話がある、夫れは現時市内に於いて氣合術の講授をされつゝある某大先生が、嘗つて日比谷の松本樓に於いて酒宴の際、友人が泥酔して二

階階段より轉り落ち、爲めに人事不省に陥つたことがある。所が平素術自慢先生黙してもゐられず、嘔けつけて寝かせたまふ盛んに氣合を掛けたが、二時間餘も辛抱して遂に何等の効果なく、可惜大先生の名に掛る所であつたが、先生どう考へたものか、假死若を起して兩手に之を支へ、腦天から猛烈に氣合をかけると、二時間餘に及ぶも無効でもう全く死んだものと思つてゐたものが、ウーンとウナリ初め目を見開くに至り、衆人皆眉を開いたと云ふ話がある。  
 之は氣合の効果も然ることながら、期せずして此の起して氣合をかけ、兩手が患者の兩肩にかゝつてゐたことは、第二活法と第五活法とを混用した様な工合になつたのである。  
 心靈界の研究に没頭するものは、とかく物理的方面をうとんじ勝ちだが、此の話をよく玩味して、更に活法の眞精神を體得し、時に臨んで之を用ふ可きである。

### 第六款 翠丸活法

翠丸に強烈なる打撃を受ける時は、翠丸は上方に舞上り、人事不省になるを普通とする。此の場合に施すべき活法は、通例翠丸活なる名を以つて呼び、柔道家の間には奥傳を以つて許されることになつてゐるのである。

吾人が田舎にて道場を持ちたりし時、吾人の不在に稽古中、亂取寢業にて咽喉の縮合をせし時、上方より下方の者を締め居りし者が、突然人事不省になりたる爲め當時居合せたりし初心の代稽古の者かけ寄りて、活法を施したるに、寸時人心つきて直に復人事を辨せざるに至るより、是れ吾人が豫ねて話し置きたる活の相性によるものなりと早合點し、種々の活法を試みたるも遂に効なく、萬止むなくして、吾人の出先に來り事の由を告げたるより、事情を聴取した後そは定めし翠丸の上れるなるべし。翠丸活法を施せしやと云ふに、心附かずして未だなりと云ふ。然らば

と立ち歸りて試みしめたるに、果して吾人の言の如くにて其の後は異常なかりしとて今も一つ話にして互に誠め合へり、眞に翠丸活法は大切なるものである。

而して其の法は、患者を抱き上げて臂を浮かせ、薦骨の部を足の拇趾裏にてトンくと蹴るか。拳を以つて何人かに打たしむる時は、大抵翠丸は下るものである、若しなほ下らざる時は、耻骨接合の上端と、會陰部より指端を以つてもみ出す心持ちにて押す時は必ず飛出すものである。

即ち翠丸が下りたる後は、第一より第六に至る活法は、何れを施すもよいのである。唯最後に神傳活を行ふを要するのである。

### 第六章 惡癖矯正法

惡癖矯正なる別題を掲げても、要は圓融法を施すにあるのである。併しながら更に之と共に、第一型式より第五型式に至る迄を、随時用ゐることを要するのである

治療に用ゐる圓融法に於いては、術者に何等の思念をも要さなかつたのであるが、此の矯正法に於いては何々の疑を矯正するとの強烈なる思念を必要とし、更に被術者と術者との間に、術者は被術者甲の爲めに其の惡癖を矯正すとの自覺と、強烈なる思念を要し、甲は術者は我爲めに今何々の惡癖を矯正せんが爲めに施術せりとの自覺を必要とする、否之ある場合に於いて、奏効の顯著なるを見るのである。

### 第一節 吃音

吃音は諸種の惡癖中でも、其の數に於いて最も多きものであつて、其の先天的なると、後天的なるとに論なし、之を矯正することは、頗る困難なことであるが、我が氣合術法に依れば、比較的容易に治療の目的を達し得る。

矯正法。後天的吃音は多くは他の吃音者の眞似を爲すに由つて此の癖をなすのである、又或一部は一種の神經衰弱症から非常にセツカチになり、發音をアセル爲

めに、遂に吃音の習慣を得るに至るのであるが、既に吃音者となれば、其の後天的なると、先天的なるとに論なく、一樣に下腹部の力の充實を缺いてゐるものである。施術者は此の點に注意して、先づ患者の姿勢を正し、下腹部に力を充實せしめ、眼と口とを充分に塞がしめたる後、眉間に第五型式を行ひ、然かる後咽喉部、頸部、胃部、腸部と、順次に第一乃至第三型式を行ひ、更らに頭部、特に後腦部に、第二型式を行ひ、然かる後圓融法を行ひて施術を了るのである。

注意 補助法として靈動の勵行と、靜座、深呼吸法を行はしめることを要する。施術の結果はよく一回にして奏効する場合と、數回乃至數十回を要する場合とがあつて、經過は必ずしも一樣ではない。而かも之は決して術者の技倆、如何に依るものではないのであるから、術者は經過に囚れることなく、殆んど放念、放任的に施術する事を要する。

由來吃音矯正をなす場合に當つて、施術者よりも更に被術者、及び之が周圍の者

が非常の興味と期待と 以てするだけ、それだけ其の効果に對する監視が嚴重苛酷であつて之が爲めに免もすれば其の効果を殺滅せられることが多いのであるから、特に術者に於いて強い自信と覺悟とを持つて立つことを切要とするのである。

此の意味に於いて、患者を他と隔離することが出来るならば更に好都合である。

### 第二節 書 瘧 瘵

書瘧瘵と言ふのは、文字を書寫せんと欲して執筆したる際、瘧瘵の發作するを言ふのであつて、惡癖と言ふよりは寧ろ一種の疾患と言つた方が本當であるが、其の瘧瘵發作が、毛筆の時よりもペン鉛筆等の如きものゝ場合が、左迄に甚しくない點に考へて、茲には矯正し得る方法を述べることにする。

書瘧瘵の原因は、主として文字等の書寫の過度なる爲め、筋肉過勞を發し、爲めに起るものであつて、タイピスト、又はピアノリスト等の音楽家を初め、裁縫師、彫

刻師其の他卷貫捲業とする者等凡そ主として指を過度に使用するものにも發するものである。

**矯正法** 補助法として靈動を盛んに勵行せしめることを要する。

頭部其の他に腦病の場合と同一型式による施術を爲し、次いで兩腕に第二型式を行ひ、更に術者と被術者との指を交互に粗み合せ、第五型式の心持にて氣合の移轉をやりたる後、圓融法を施すのである。

**注意** 出來得ることならば、施術期間は書瘧瘵の原因を與へたりと認めらるべきことを禁ずるを可とするのである。

### 第三節 飲 酒 癖

飲酒癖の矯正の如きに至つては、患者と術者との間に精神的連絡のある外に、更に患者が自己の欲望に打ち克たんとする努力、若しくは尠くも之を節せんとする意

思の作用を要する、矯正を依頼したる一面、放縱自儘に飲酒をするならば、容易に目的を達成せられるものでないのは自然の理である。

斯く言へばとて決して兩者の間に催眠術的連繫を要するとの意ではない。術者の努力を患者の放恣に依つて打ち破らざらんことを希ふ意なのである。

勿論患者の少しも之を知らざる間に、施術して矯癖の目的が達し得られぬと言ふのではなく、斯様の場合患者が先の如く破壊的反対的態度に出るよりも、一層容易に目的を達し得るのであるが、夫は普通の術者が通常の努力を以てしては望み得ないことである。

矯正法 姿勢を正し、眼を閉じ口を塞いで、深長なる呼吸をなさしめ、先づ肩間に對して第五型式を行ひ、次いで頭部、前額部、後腦部に第二型式を施し更に頭部及び特に咽喉部に第一又は第三型式を施し、然る後胃部及び腸部に對して第三型式の施術を爲し、更に心臓部に強き思念を加へながら第一型式を施すのである。

次いで圓融法の施術をなすべきである。

#### 第四節 喫煙癖

前節の説明に依つて大様は推測がつくことと思ふが、喫煙癖は其の性質に於いて飲酒癖よりも矯正し易きが如きも、却つて誘惑に陥り易く、爲めに施術の効果が破られ易く、結局矯正の目的を遂げ難いものであるから、患者も術者も、最初から其の覺悟を以つてかゝるべきである。

矯正法 施術の法は前款に法とればよい。

注意 前説明の通り、予の施術の經驗に依ると、本癖の者は一寸やめて、また容易に初めるものが多いのであるが、既に一寸でもやめれば、夫れ丈け効果があつた譯で、短氣を起さずに施術をしてゐれば、次第に喫煙を廢する期間が長くなり、遂に完全に目的を達するものであるから、其の心積りで施術すべきである。

### 第五節 内辨慶癖

内辨慶癖とは、所謂内辨慶の外すばりで、陰に強く陽に弱きの謂であつて、家内知友の前に於いては大言壯語なかく、豪勢なるも、一度家を出でんか恰も喪家の犬の如く、更に公衆の席上、或は上長官の前に出でんか、内心非常の苦悶を感じ、顔面に紅潮し、全身顫動を生じ、事物を正視し難し、舌は硬化して言語自由ならず、其の甚しきに至つては、遂に卒倒するが如きものを言ふのである。

**矯正法** 本癖は特殊の神経衰弱であつて、之が矯正と云ふよりも、療法は同病の治療法に依るべきであるが、更に大要を述べんか。

- (1) 常に正姿勢を維持して、雄々しき態度を常に持する様心掛けしむること。
- (2) 静座腹式の正呼吸を勵行せしむること。
- (3) 靈動を勵行せしむること。

(4) 眞英雄偉人の傳記等を讀ましむること。

(5) 平素の大言壯語を戒め、出来る丈け口を開かざる様心掛けしめ、氣を内に藏することになれしむること。

以上の五ヶ條を補充法として充分に練習勵行せしむる外、施術としては下腹部に強き第三型式を施し、胸部、胃部、腸部に第二型式を施し、心臓部に對し第三又は第四型式の施術をなし、次いで頭部、顔面部に第一型式を施すべきである。而して後猛烈なる思念の下に圓融法を施すべきである。

施術準備として患者を正座せしめ、深長なる呼吸を命じ、患者の前額に第五型式を施すべきは言ふ迄もない。

### 第六節 手淫癖

手淫の多くの場合淫蕩なる周圍に刺戟せられ、内的には淫欲の満足と云ふよりも

一種の好奇心から之を行ひ、遂に次第に度を重ねて癖をなすに至るもので、既に癖をなすに至つては如何なる癖も同じことながら、特に本癖は自家抑制なる力を缺くものにて、誠に矯正の目的の達し難いものである。

矯正法 神経衰弱症を既に誘起せる場合多きが故に之が爲めに療法を施す必要あるべきも、未だ誘起せざる時も、神経衰弱症同様の療法を行ふべきである。

- (1) 正座腹式呼吸を勵行せしむること。
- (2) 靈動を勵行せしむること。
- (3) 水浴又は摩擦を勵行せしむること。
- (4) 可及的獨居せしめざること。
- (5) 戸外に運動せしむること。
- (6) 寝前必ず靈動法を修し、腹式呼吸をなすこと。
- (7) 淫欲の起りたる時は、別篇所掲に従つて雄健雄語をなすべきこと。

但し本項は本人自から施術を申立てたる時の外、命じ難きことなるも、他の施術に託して種々の雑談をなす際、暗示を與ふる等のことに依つて教へ命ずるを得べし。

以上の補助法を執りつつ、頭部に、胸部に、胃腸部に第一第二型式を行ひ、更に臍下丹田に第三型式を行ひ、陰部に對し第五型式を施すべきである。然かる後圓融法を施術するのである。

注意 患者に瞑目深呼吸を命じ、眉間に對し第五型式を行ふべきは云ふをまたぬことである。

### 第七節 色情癖

色情癖とは色情性の異常に昂進したものを指すのであつて、其の度が更に甚しくなれば、遂に色情狂となるのであるが、此所に言ふものは、尙ほ未だ常識を失は

す、唯だ其の性慾の昂進し來つた場合に、自己意思を以つて抑制し難きもの、及び異性を甲より乙、乙より丙と轉々する性癖を有するものを指稱するのである。

**矯正法** 本療法を自身に依頼する者は、奏効も顯著下迅速であるが、男女とも自から依頼する場合は尠い。多くは他人より依頼され却つて本人には何等の承知承諾をも得ずに施術することが多いのであるが、直接治療の場合は、可及的何等かの方法に依り（例之他の病氣の治療に託するが如き）、本癖矯正の目的に適する様な術をなし、補助法を勵行せしむ可きである。

**併し其の矯正法の要領に至つては、前節手淫の條下に述べた所を斟酌すればよい。**  
**注意** 飲食物としては刺激性のもの、及び肉食を禁じ、野菜食を勵行し、所謂暖衣飽食をなすことを避けるがよい。彼の夜具の如きは、特に此の注意を要するのである。

出来るなれば、ある期間特に交接を禁ずる様にすれば奏効は更に確實である。

### 第八節 盜癖、賭博癖及殘虐性

本節に三種の癖を同時に掲げたるも、其の癖の原因は決して同一であること云ふのではない。所謂精神低格者の仲間であつて、心身に何等かの特殊缺陷を包藏し、之が爲めに諸の惡癖となつて顯はれる點は同一である。

併し身體的方面の缺陷としては、胃腸病乃至心臟疾患が其の最も多きを占め、更に女子に在つては子宮疾患が因をなすことが多いのである。

本癖治療矯正に當つて、術者の深く特に注意すべきことは、彼等は悉く精神作用に特殊の偏畸を有し、普通の人情を以つて解し難き點を有することである。

此の點に深く注意し、出来るだけ本人の今日あるに至つた経路を探查して、患者に對する血の逆る様な同情、人間性を有する生々とした同情の下に、矯正にとりかゝらねば、却つて意外の結果を招くに至るのである。



聊か事例が外れる様な感もあるが、魔窟に住む女の群を救はんとする、或る聖い人達が、或は社會廓清とか、風教維持の爲めとか云つた様な、自分達本位の御都合主義や、神様に對する努めであると云つた様な冷い義務觀念や、乃至彼等は哀れなるものなり、我より弱きものなり、救はずんばあるべからずてな理性や、道念から割出された場合や、更に彼を救済することに依つて己の名を爲さんとするが如きさもしい心情からなされた場合には、反つて彼等の反感を買ひ、嘲笑を受けるのである。眞に彼等を救はんとするには、彼等自身の人性に觸れた眞同情から起る場合でなければ駄目である。淪落の底に沈めるもの、胸奥にも、本統の人間の心の閃きはある。先づ之に到達する迄に、同情（夫れは通り一遍の人間のする同情でなし、眞に彼等を解したるものゝする同情）に依つて、彼等と精神的に合體することを要する様に、本癖の矯正をなさんとする場合には、必ずこの理解し、合體せる點より起れる同情を要するのである。

矯正法 型式としては、経過によりて夫々工夫すべきではあるが、先づ前記の癖の原因とも見るべき神經衰弱症、及び心臓虛弱症、子宮疾患等に對する治療型式を施し、更に圓融法を施すべきである。

注意 補助法としては、前掲を参照參酌すべきである。なほ小説、活動寫眞、芝居其の他好奇心、及び性欲を誘發するが如きものを避けしむべきである。

### 第九節 美食癖

世俗傳へて言ふ、此の世は食ふ界（空海）、先きの世は滅法界と、其の本義は別として、人間は其の生活の第一要件として食ふことをあげる。即ち花の下より、鼻の下で、彼岸佛でないけれど、花より團子の世の中である。

既に飲食は其の心身を保持せんが爲めの藥餌であるとすれば、必ずしも美食するを要さないのであるが、唯口腹の慾に馳られて、美食の癖をなすに至るのである。

口腹の慾は身體の生理的要求と一致しないのであるから、本矯正法によつて食慾を正しき生理的要求に止める様にすべきである。

**矯正法** 及び其補助法には、前掲を参照考察すれば自得すべきであるが、本癖は特に身體の閑散なる者に於いて甚しいのであるから、特に此の點に注意を拂ふことを要する。

**注意** 美食するを以つて、優等なる生活なりと考ふが如き觀念に反する、正道徳的觀念を修養することは、切要なることである。尙消極的注意としては、粗食慾を誹るが如き書物及び事物の見聞を禁するがよい。

### 第十節 美飾癖、虚言癖

本癖は特に婦人に多い。而かも都會地に住む婦人に更に多い、物質文明の進歩、黄金萬能主義の世に於いてヨリ更に甚しい。

本癖及び虚言癖等は、下腹の力の充實不充分で、臆病な者に最も多きを見るのである。實に斯かる惡癖に惱める者は、既に自己の存在尊き自己の存在を自覺することなく、唯醜き肉の自己を知るのみのものに多いのであるから、治療矯正の補助法としては、最も自己内心の修養に重きを置かしむべきである。

**矯正法** 患者をして正座瞑目せしめ、深長なる呼吸を命じ、其の眉間に第五型式を施し、下腹部丹田に第三型式を施し、頭部に神經衰弱と同様なる施術をなし、更に胸部、胃部、腹部に第二型式を施し、次いで患者を仰臥せしめ、下肢に第二型式を施したる後、足心活を行ひ、次いで更に正座せしめて、強烈なる思念の下に圓融法を施すのである。

補助的方法としては、第六節に述べたる所を参照すべきである。

### 第十一節 潔癖

由來我が邦人は清淨性を有する。特に立國の本義たる祭祀の時の如き、修祓を以つて第一義とし、國民修養の唯一唯神の方法として禊祓が傳へられてゐる。此の清淨を愛し、心身の常に清淨高潔ならんことを欲するは、實に我が邦人が世界にまたなき高等なる民族なる事を表徴するものであるが、若し之が度に過ぎて、所謂潔癖とならんか、實に其の癖より生ずる苦痛に堪へざるのみならず、時には汚穢せりと之感が一種の強迫觀念となつて、當人を苦しめ、更に甚しきに至つては、精神病者に等しきものとなるのである。

本癖を心理的立場より、専門に研究した者の言ふ所に依れば、本患者は實に精神低格者の一種にして、必ず生理的、特殊缺陷を有するものであると。

既に生理的缺陷を有するもの、又は父祖の反對性遺傳よりして本癖を發し、次第

に癖の昂進するものなるが故に、其の未だ甚しからざる内に之を治すべきである。

**矯正法** 本癖患者に對しても補助的に

(一) 正座、深呼吸、靈動三者の勵行をなさしめ。

(二) 常に思ひ出したる毎に、常不斷に腹力の充實を圖る様命すべきである。

直接の施術としては、瞑目正座せる患者の眉宇に、強烈なる氣合をかけ、第五型式を施し、更に圓融法を施すのである。

本章に述べたる所に依つて、矯正法は盡きたと云ふのではない。併しながら之を類推し、參酌するならば、如何なる惡癖に對しても、矯正法を施すべき方法を自得し得るものと信するが故に、一先づ筆を擱くこととする。

本章に述べたる矯正法も、亦遠隔法に依ることが出来るのである。併しながら、本章中にも述べたる通り、普通の療法の場合よりも、特に術者と患者とが密接に

關係を保持することを要すべき場合があるからして、自然其の奏効の點に於いて、普通の遠隔治療よりも、鈍い點があることは始めから承知の上で行ふ可きである。

### 心身改造

靈動氣合術  
氣合治療法

### 講義錄(第六

公衆治療及  
惡癖矯正 篇)終

## 心身靈造

靈動氣合術  
氣合治療法

## 講義錄

大日本靈學通信學校講師講述

# 第七 神奇篇

## 緒言

本篇は名づくるに、神奇の二字を以つてしました。如何にも、神怪鬼變の奇術を説くかの様に聞えますが、實は至極平凡な事を説いてあります。元來靈眼が開け、靈智の哲らかな方に、神變奇怪なことは、一つだつてある譯は

ないので。古諺に『正法に不思議なし。』と、言つてありますのは、全く此の謂な  
のです。然しながら心眼が深く閉ちて居り、靈智の未だ開けてない方には、如何に  
も神變不可思議な、事と見られる様なことを書きましたから、暫く神奇といふ語を  
借りて、本篇の名と致した次第です。

吾人は、其の根本の性質からして、己れの理智によつて、理解し得られたことは  
躬ら行ふ事が出来なくとも、之を平凡な事とし、道理に叶つた事として、何等の怪  
異を感じないし、理由理法は解らない迄も、二六時中見なれ、聞きなれ、アリフレ  
た事とし、何の不思議をも感じません。更に自ら行ひ得る事になりますと、たとへ  
どの様な奇怪なことに對しても、少しの疑念を挟まないものです。之と反對に、自  
分の豫期しない事に對しては、尾花、薄のヲノノキにも、幽霊の怪を感じ、自己の  
理解を超越した事象に對しては、神異を以つて見、或は風伯雨師となし、或は鳴る  
神として、之を崇敬します。寔に今日の我等の知識を以つてしては、何等の神變奇

怪を感じない電氣に關する諸現象、及び飛行機、潜水艇も、所謂未開野蠻の徒には  
如何にしても、之を理解せしめ難く、彼等は之等に對しても、驚駭と畏怖と、崇敬  
の念を以つて接するの外は何物もありません。帝都訪問の伊國飛行家が、中央亞細  
亞の蠻地に着陸した際の物語は、能く此の間の消息を傳へてゐます。期様に神奇と  
いふも、畢竟は其の人と、時と、處とに依つて、天地の差異のあるものです。  
斯の篇中に説く所も亦然りで、甲乙の所感、感得必ずしも一致いたさないと信じ  
ます。否な寧ろ各人の間に、徑程、軒輊の甚しいものがあらねばならぬと思ひます。  
見る人の心にまかせおきて

空には清し秋の夜の月

右の古歌の意の様に、同一事象、理法に對しても、之に對する各人の素養と、修  
養が違ふために、其の感知する所に差はあつても、客觀の秋の夜の月に相違のない  
様に、本篇に述ぶる所に對して、神奇を感じ、驚異の眼をみはる者も、平凡なる事

として、一切を承認さるゝ者も、其の間に何等の差異なく、同様に行はれ得る譯ありませぬ。

幸に諸子が、右の道理を感悟して、平凡な事として侮らず、何處迄も眞面目に不可思議事として驚畏せず、何處迄も熱心に、本篇に對せられることは、諸子が斯道の極致に達する便益のいよ／＼饒いのみならず他日諸子が治療の上に應用し、或は處世の上に應用せられる點の、多いことと信じます。

### 上篇 不死身篇

古來不死身なる者は、生れ附の様に考へてゐる者が多い、決してさうではなく全くは修養に依つて、誰人も容易に得られるものである。而して其修養法の如きも、昔から随分いろ／＼な法が案出され、傳へられてゐるが、何れも吾人が、別篇に於いてくわしく説示して置いた、六法の外には出ない。併かし此所には、全く

の不死身になつて、諸種の奇現象を顯はし得るに至らない人にも、六法修行の傍、吾人が示す注意の許に行なへば、何人にも容易に行ひ得るものを、かゝげることになりました。言ふ迄もなく、之を行ふ程度の深淺と、結果の良否とは、一つに修養修練に待たねばならぬことは、今茲に言ふ必要はあるまいと思ひます。

### 第一章 身肉に鐵針を挿して疼痛なきこと

之は誠にやさしい事で、下腹丹田に充分に力を罩め、全身の力を、唯この一部にあつめて、他の力を抜き、全く肉がグニャ／＼になつた時に、何事をも考へずに、唯スウート挿せばよいのである。と言つた許りでは、到底信じられないかもしれないが、醫師に注射される時のことを思へば、了解の出来ることと信ずる。

注意 (1) 挿す場所は頬、腕、腿等肉の豊饒なる所を擇ぶべし。(2) 肉に力を入れざる様心すべし。(3) 針は別に消毒の必要なし。(4) 木綿針は細過ぎて折れ易し、忌

む。蒲團トジ針、靴針、ボンネット用ヘヤーピンや墨針等可なり。錐の太きものは痕迹を長く止めるが故に忌む。(5)抜き取る時は上層の肉を押へ、手早く抜くを可とす。抜きたる後は三四十秒の間、針穴を指頭にて押へ置くこと。

### 第二章 燭火能く肉身を焼かざること

之も想と力を臍下に收めて、炎々たる燭火、大なる程よい。燭火に代ふるに、石油洋燈の火焰にてもよい。之を身體の如何なる部に觸れしめても、更に痛苦を感じ、火傷を生ずる事はない。其の甚しきに至つては、炎々たる燭火を、口中にし、口腔 悉く火になつても、更にアツサを感じない。之も全く虚言の如な事實で、唯虚心平氣で行へば、即ち畏れずに行へばよいのです。初めには幾分アタカカ味位を感じますが、修養を積むに従つて、それもなくなりませす。

注意 (1)燭火を身體に近くスリツケル事が、尤も大切な秘傳とせられてゐる。

- (2)火を一定の所に置かず、絶間なく之を動かすことは、更に大切な事である。
- (3)口中に火を入れる時は、一思に挿入れ、口を恐ろし相に開かないで、唯外から口中の眞赤さが、見える程度に閉るがよい。

### 第三章 火渡護摩の法

此の法は、古來から所謂行者なる者に依つて、研究され、傳へられたもので、世人の多く知る所である。

法式は、方六尺の土地の表面を、深さ三四五寸掘り取り、海岸の白砂を以て、アトを埋め、更に鹽を散布し、以上の準備をなすを、行者達はお清めと稱して、呪文を唱へ、九字の秘法を修し、森嚴なる儀式を以つてするのであるが、吾人は敢て其の必要を認めない。松薪を山と積み、兩端に濃厚なる鹽水をしませた俵を置き、準備いよくなると、薪に點火し、其の八九分通り燃えて、地に恐ろしき迄に炭火の

生じたる時、一端より他端まで、一氣に經文を唱へながら通り過ぎるのである。此の場合に於ても、決して經文の必要はない、大聲で磁節を歌つてもよいのである。  
**注意** (1) 薪は必ず松、若しくは杉でなくてはならない。(2) 少くも七分通り燃えたる後にする方が安全である。(3) 必ずしも必要とほしないが、大聲をあげる方が都合がよい様である。

### 第四章 握れる剃刀を抜きて傷つかざること

掌中に、トギスマシタル剃刀を握り、握り拳の上より帯又は手拭の類を巻きて、其の兩端を大の男子二人に持たしめて、力限り之を引かしめ、充分に拳の締りたるを見計ひて、曳と一聲の氣合諸共、剃刀を引抜くも、掌は聊かも傷けらるゝことなし。法は丹田に蓄へたる靈力を全身に傳へ、拳は初め握りたるまゝにて、左右より如何なる剛力によりて引かるとも、之に對しては無關心にて、我は無我の狀に居て

唯引き抜けば可なり。

**注意** (1) 腹力未だ充分ならざる者は、随分注意して之を行ふも、時に失敗をなことがないでもないが、先づ剃刀は、掌に背に向け、刃を指先に向けて、掌に置き、之を軟かに握る。(2) 布を拳に巻きて、左右より引く時は、全身に腹力を配して、之に抵抗すること。(3) 氣合と共に、刀背にて掌を強くすりながら、軽く引き抜くこと。(4) 斯くて刃先と掌面との間には空間を存すること。

### 第五章 鐵火を抜きて火傷せざること

鼎錢甘きこと飴の如しとは、志士が其の所信を斷行するに當つて、王法の刑罰に觸れるも、敢て意に介せざる意氣を歌つたものであるが、倦まず、撓ゆまず、心身修練の六法を行ふて久しきに至れば、何人もよく、水に溺れず、火に焼けぬ不壞金剛の法體になるのである。此の理は本篇の序にも説いたが、封建の代、一禪僧が、



西國の某大名の忌に觸れて、灼熱せる鍋を被せられて、尙ほ平氣で自己の所信を高唱したと云ふ、實話が證してゐる所である。併しながら容易に至域には達し得られない。其處で所題の如き事に、一應の満足をしようとするのである。

先づ細きは火箸の如きから初まつて、太きは握りに餘るやうな鐵棒を、眞赤にヤキ、未だヤケざる一端を左の手に握り、右手を以つて左手の上部を握り、曳の氣合と共に灼熱の鐵棒を、前方に扱く可し。言ふ迄もなく、臍下に力を藏し、氣合の満つるを待ち、一氣に扱くのである。

注意 (1) 丹田の力が、不充分であると恐が出で、力が身體の他部にも籠り、一氣に扱けなくて、怪氣をするから、氣をつけねばならぬ。(2) 次第に灼熱部の長が増してもよいが、初は四五寸を程度とする。(3) 餘り幾回も扱かないで、先づ五六回でやめるがよい。(4) 鐵棒をたたけば、ペラ／＼になつて、はげて落ちる様な錆は、充分落して置くがよい、燒錆が手に附著して火傷することがある。

(5) 氣合がくだけで、二段に扱くと必ず火傷するから、一氣に扱く稽古を冷たい棒でして置くのも妙である。(6) 棒が衣服に觸れない様にしないと、觸ると直ぐ焦げるから大變である。(7) 鐵棒は可及的、充分に熱しておいた方がよい。(8) 一寸考へると、誠に恐しいことの様であるが、堅炭の眞赤な火も、手でたゝいた丈けでは、決して火傷しないことを思つて、思ひ切つてやつて見るがよい。

### 第六章 熱湯を浴びて火傷せぬこと

古來所謂行者なる者が、行ひ來つた法式は、清淨なる水を汲み來り、之を煮沸して其の沸騰するに至れば、神前に捧げたる神饌を、釜の中に投じ、お淨めと稱して食鹽を投入し、激しく九字の秘法を修して、己れまづ笹の葉等にて熱湯をふりかけ次いで群れる信者等にふりかけるに、何等熱さを感じないのである。斯う書くと、如何にも神の守護によるか、九字の秘呪の妙力の勢の様であるが、決してさうで

なく、唯行へば良いのである。

### 第七章 九字の秘法

九字の秘法は、古來兵家、道家、行者、山伏等の間に非常に神聖視され、大層重寶がられたものであるが、此の篇に述べる所とは、全く無關係である。しかし、既に第三章でも、第六章でも、偶々言及した所であるから、一通り説明することにした。だが此所には、全く其の形式を説くに止め、歴史や、效能は説かないことにする。唯諸子が、一意専念朝暮に之を修するならば、遂には刀印に依つて、岩石を切り、一聲の氣合と共に、空に拂ふ刀印の妙力に依つて、空高く枝張れる巨木の幾枝を切落すことも容易であると、古來から之を傳へるもの、間に信じられてゐる。

法式 次に示す九つの文字、一つ一つに其の下に、説明した手印を結ぶのである。

#### 臨

左を下に、小指、薬指、中指を左右交互に内側（指先が手背に出で、前手の掌の方にある様にする）に組み、人指を立て合せ、右の拇指を、左の拇指にて抑へる。斯く手印を結び臨と稱へながら、一振り振りて次印に移る。

#### 兵

小指と、薬指とを内方に折り、左右の指背を合せ、人指を立て合せ、中指にてカラミ、拇指は左右併べ立て、中指の指端と、拇指の指端とを相接せしむ。

#### 闘

左の人指の端を、右の薬指と中指との間に置き、右の人指指を、左の薬指と中指との間に置き、中指を内方に折りて、左にて右の、右にて左の人指をからみ、小指、薬指、拇指を立て合はすべし。（拇指は耳となり、小指、薬指によりて口を作り、人指端は眼となりて、外向きの獅子を生ずべし、是れこの印に、外獅子印の名ある所以である。次の印は内獅子と名づけられてゐる。）

### 者皆

鬪と向きの変つた印を造るのである。薬指端を、人指と、中指と、間に按じ、中指にて、其の交叉をカラミ、拇指、人指、小指を立て合はすのである。左を下に、五指を順次に交互に外側（指が手背に表はれる様）に組むのである。

### 陣

左を下に、五指を順次に、而して交互に内側に組むのである。此の印で、特に注意を要するのは、十指を殆んど、一處に集める様な心持でやることである。

### 列

左の人指を立て、拇指端に中指、薬指、小指の各端を集め、掌を出来るだけ圓い虚にし、右手の五指の端は、左手で人指端を圍んで一處に集り、掌はなるだけ圓い空虚にするのである。

### 在

左右の拇指と拇指、人指と人指の各端を接して、圓い形を造り、他の六指は開き放して、放光の形とするのである。此の印相は、古來日輪放光印と

名けられてゐる。その心で結ぶがよい。

### 前

右の手上に、左の拇指を圍む様に、他の四指端を集め、掌は圓い空虚となりたるものを案じ、右の拇指は軽く内方に折り屈げて、左の手の爪と、右の拇指の爪とが、相接する様にする。

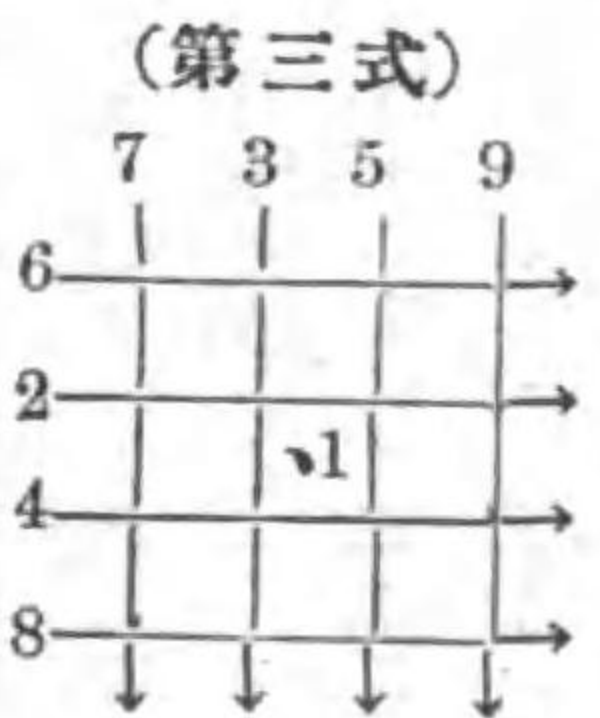
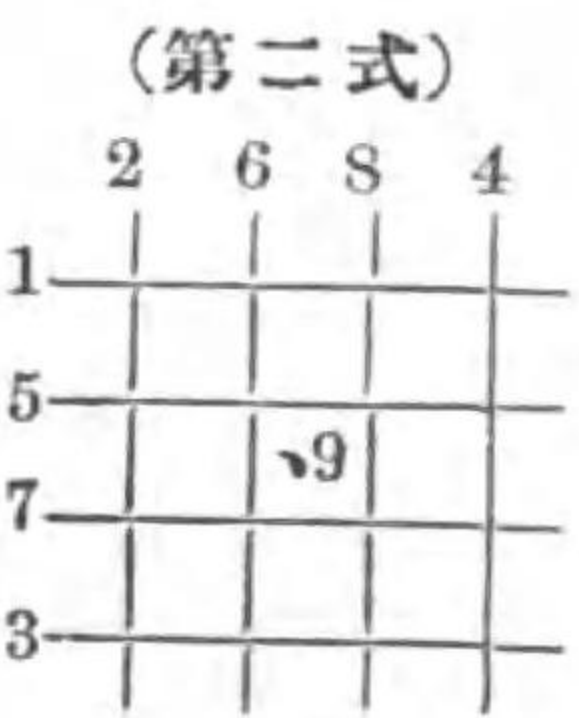
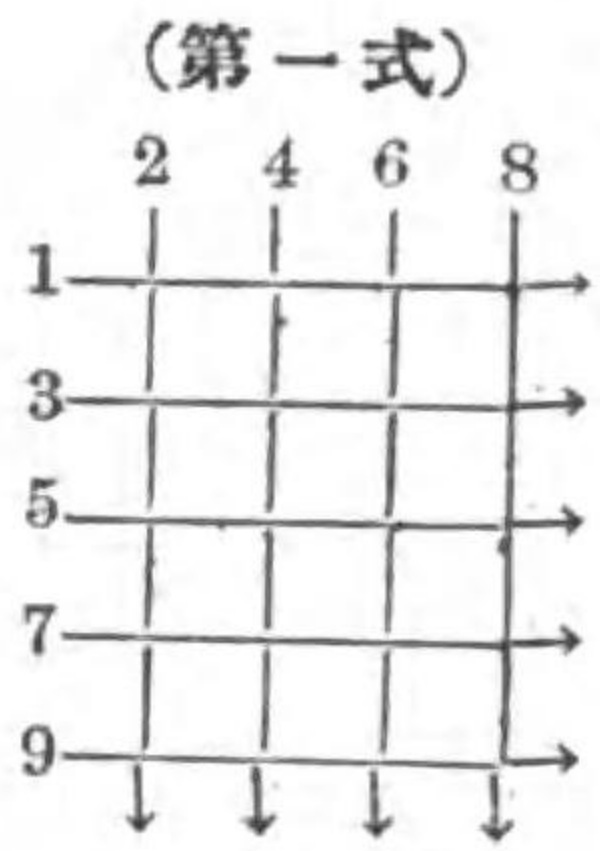
右に示す所に依つて、九字の印相を結んだならば、今度は前の印を結んだ儘「惡魔降伏、怨敵退散、七難消滅、七福速生秘呪」と稱へ、秘呪と唱ふると共に、息を氣合込めて、左掌の虚の中に吹き込み、直に印相を解き、刀印を結ぶ。

刀印とは、右手の人指、中指を併べ立て、薬指、小指を内方に折り、拇指にて之を押へ、左手は右手の人指、中指の併べ立てるを刀身と心得、鞘を造る心地にて之を握り、拇指は他の四指を押へる様にする。

刀印を結びたる儘、丹田に十二分の腹力を堪へ、全身に將に顯動の發せんとする刹那、手力を抜き、左手の鞘は腰に案じ、中空に九字の眞言を稱へつ、縦横の

劃をなすこと三度に至るのである。

この縦横劃に秘傳があつて、次の三樣式が用ゐられてゐる。第一式普通形式。第二式惡魔惡靈封じの形式。第三式惡病、惡靈、惡魔拂ひの形式。



右何れの式にする多合も、一劃毎に一字を稱へ、必ず同様のことを、三回繰り返して行ふ可きである。

出来るならば、水垢離を取つて、切るべきである。

### 第八章 早九字のこと

之は、古來多く兵法家の間に用ゐられたもので、九字に代るべきものとせられてあるが、特に獸類より來る邪靈、惡氣を防ぐために使はれた様である。

法式としては、右手に刀手を結び、臍下丹田に心氣力を充實せしめ全身に將に顯動の生せんとする刹那、手刀を以つて「虎」の字を中空に描き、「我は虎、如何になくとも犬は狗、獅子のはがみに怖れこそすれ」と呪文を唱へ、更に充分に力に充ちた氣合を以つて、九字を劃するのである。此の場合の九字の劃し方は、右手を開き、指を伸べ、揃へたる儘「曳」と氣合を發しながら、上から下へ五線（指一本で一線を劃するものとする）を劃し、拇指を屈げて、他の四指を伸べ揃へ、左より右へ「矢」と氣合を發し、更に「當」の氣合を發心して、所謂殘心の心持ちであるのである。

所謂、殘心とは、兵家の言であつて、敵を切り、或は敵を投げたる後、尙ほ敵に注意を止め、心をゆるめぬことである。

(附言) 二章に互つて印のことを説明したが、如何なる印契を結ぶにも、結ぶ人

の手が、次に言ふが如きことが出来ねば、完全な印想は得られないとしてある。  
 先づ左手を下に、右手を上、手背と手背とを相接させ、小指と小指、人指と人指とを絡み合せ、左手の拇指を、右手の掌の方へ廻し、拇指と拇指と相接せしめる。之が出来さへすれば、如何なる印相も、完全を期し得るのである。斯う書くとき、筋肉、關節の硬化した老人や、筋肉労働者は、一寸出来ないために、不可能なことを注文した様に考へるであらうが、婦人、子供にやらせて見ると、容易にやり得るので、合點が行くことと思ふ。

斯の篇に餘り關係が薄く、而も大方の人に信を置かれない、印契の事を説明したが、事實に於いて、印相其のもの、呪文其のものには、何の重大な意義も存してゐないかもしれない。實際古來傳つてゐる所によつても、九字の次ぎに「行」の一字を附加して、十字にやるやり方もあれば、印契の相の異つてゐる所もある。しかし之

を事實の上に見た効能から言つて、何等の差異もない、尠くとも吾人の實驗から、之を確言し得る、點に徴しても、此の點は明瞭なことであるが、然し世の如何なる事も、同一内容を有しながら、形式を幾つにも變へるものがある。例之同じ禮をするにも、擧手の方法あり、拍手あり、握手あり、所謂お時宜なるものがある。甚しきに至つては、對者の足をなめ、或は大地に大の字形に打臥す形式さへもある。が併し何の形式をもぬきにしては、決して禮の意は表はれない様に、必ず何等かの形式によらねば、意も、氣も、表はれるものでない。同じく形式をとるならば、古來から、尤も多く行はれて、最も多くの人に依つて認められる形式をとることが、最も賢明なやり方である。此の意に於て、上述の形式を練習されむことを切望する。

此所に説明した所に依つて、吾人の九字、其の他現在一部の人に依つて尊重せられてゐる呪文、加持、祈禱なるものに對する解釋、態度は、充分瞭解されたことと信じるが、要は斯術の立場から見ても、尤も完全な、心身の保有者の丹田、否全身か

ら流出する靈氣、其の者の力であると云ふのである。

斯の解釋を承認する人は、當然の順序として、心身の完全なる鍛錬、養成法たる別篇六法の何れをも修せざる、(特に吾人に就いて學ばずとも、冥合したる者は例外なり)者が如何に形式のみをまねたりとも、何等の効果もなきことをも、諒解して下さることと思ふ。希くは別篇を讀んで、至完な心身を得てもらひ度い。

### 第九章 沸騰せる湯を手に注ぎて飲むこと

一二三篇の各編を、不斷に修して、實に金剛不壞の心身になられた方には、斯様なことは全く問題にならないのであるが、實は容易に斯の境地に到達することは、難事である。そこで、所謂山師なる者が、其等をよい事にして、無智なる方を欺いて、物理上當然なこと迄、如何にも神秘的に説いてゐるから、筆の序でに本書に依つて、同様なことを眞面目に研究せんとする方が、欺かれない用心に、山師輩が

する本章の方法をスツバぬいて見ませう。

沸騰は激しくしてゐても、サイダを飲んで火傷をせない人は、次の方法を理解して頂けると信ずる。

所謂山師の沸騰水なる者は、水に曹達、炭酸曹達、又は重炭酸曹達を溶解せしめたるものを、火にかけると、水は吾人の手に、やゝ熱さを感じる程の温度で沸騰する。この湯を飲まうが、手に注がうが、火傷を起す譯はないのである。安心してやつて見るがよい。

### 第十章 探湯法

第九章に述べた所は、誠に子供だましであるが、深湯法なるものは、古來我が國に存し、事の正邪善惡を、識別する唯一の方法とされたのである。併し此の立場から考へると、催眠心理に依つて、觀念の力から説明され得るのであるが、道人は、

眞修養によつて、何人もこの域に到達し得るものなることを、高唱して止まない。  
古來所謂探湯法なるものは、熱湯の中に手を入れて見ると、正善な人は火傷をせぬが、邪悪の人は直ちに火傷をすると云ふのである。

此現象を心靈上から見ると、正善の人は火傷せないといふ自信があり、少しも恐怖せないので、肉體を支配する強大なる精神力、靈力の加はるのと、又科學上からは、皮膚の上面に蒸気の薄膜を生ずる關係に因るのである。

沸煮せる鍋の中にツマミヤスキ物を入れ、腹力の充實して、全身に氣のみちたる時、『曳』と氣合を發すると共に、湯中の物を把み出すべきである。

此方式を、幾度も練習してゐる中に、全く容易に出来る様になるのである。

先年淺草邊へ現はれた、藝仙こと片田源七なる老人は、別に他に何等の修養もなく、多年の間火焼きをして、火の上を通ることになれたため、アレ程容易に猛火の中を通り得る様になつたのを見て、上説練習法によりて、探湯法の至域に通じ得

る望に、光がみちて來たことを考へられるのである。

### 第十一章 鉛の熱湯中に手を入れるゝこと

別に斯く題を設けると、誠にことごとしく聞えるが、鐵火之扱き得ると同じ理由で、容易に誰にも出来る譯である。併し入れると言ふと、餘程むづかしいが、鉛を溶かしたものを、手刀で切るつもりでやればよいのである。

前章に於ける普通の水を、沸煮したのも、手刀で切れる譯で、前章に説く筈であつたのだが、熱湯は十二分に氣合の練習が出来てないために、呼吸のうまく計れないものが、熱湯を切ると、其處らになゞき散らかすから、故意と書かすに置いたのである。鉛其の他の金屬を溶かしたものは、カナリ下手な手附でやつても、決して飛沫の飛散と言ふことはないから、安心してやるがよい。

注意 鐵火しごきの章に述べたところを、參照せよ。何等變つたところはない。

### 第十二章 刀の刃渡り法

研ぎ澄した刀の刃を、何の恐れ氣もなく、ドン／＼其の上にながたり、指で刀の背と、刃とをツカミ、刀の重り下ですべらせたり、刃を頬に着けておきながら刀を引いたりなどすることは、古來の行者のやり來つた處である。

其の法式も、可なり多い様であるが、其の一つの方法を、左に書いて見よう。

先づ第一に清水を以つて身を淨め、鹽を四方に向つて撒いて之を淨め、九字の秘法を修し、左の歌を誦す。

不思議さよ、墨繪にかきし松風の、

音を聴く心、切れど切られず。

次いでアピラ、ウンケン、ソワカと三唱。之によつて刃の切る力は、止めしめられるとしてある。

夫れから、又切れる様にするためには、

すみのえの、松風の音をきくころ、

切れど切らぬは、太刀の徳なり。

此の歌を唱へ、アピラ、ウンケン、ソワカを三唱して、太刀を小振しながら「呷」と氣合を掛けることになつてゐる。併しながら、予の多年の經驗に依れば、之を決して斯様な秘呪に、微妙な力を包藏してゐるためではない。成程右の歌は、二種ともに、深甚微妙の禪味を持つてゐるには相違ないが、二三子の知り合の行者達の實験に徴しても、秘呪秘法を修する必要はない。唯虛心、淡壞何んとも思はず、平氣に刃の上に乗れば、夫れでよいのである。唯彼等行者なる者は、多年の間、秘法秘呪の妙力に依るものと、幼少の時から考へ行ひ來つたために、俄かに之を排しては所謂虛心、淡懷、何物をも恐れず、何事をも考へないと云ふ譯に行かないから、因習的に行つてゐるに過ぎないのである。



注意 (1) 又は雙刃のものがよい。片刃のものはとかく、失敗し易い様である。

(2) ねた刃を研いだ刃物も、とかくすると失敗し易いから、避けるがよい。(3) 普通大抵の家に藏してある、刀劍なればそれでよい。刃の上には、しづかに上つて、迂らぬ様にすることが第一肝要な注意である。(4) 古來の行者は、婦人のサワリなどを、深く忌む様であるが、決して差支はない。(5) 都下のある有名な氣合術の先生が、矢張り不死身の徳の例證として、研ぎすました刀の刃を頬にあてて刀をひき、皮に赤き痕を生ずるも、切れないのを示して得々としてゐる様であるが、之は一つの手品である。だまされぬ様に、こゝに稱明しをする。

(イ) 頬に刃を當てたる時、迂らぬ様に注意して、強く押へ、(ロ) 力を抜いて、軽く刃を頬の上を迂らせる。斯うすると、赤い眞赤な刃痕を残して、刃は頬を迂りながら、決して切れないのである。(6) 之も都下の有名な香具師が、刃に油を塗つて、夫れで刃の切味がとまる由を示してゐるが、之も刀の持ち方による

のである。別に油の徳ではない。

### 第十三章 堅炭の火を渡る秘法

第三章に於いては、古來傳はる所に従つて、所謂火渡り護摩の法を詳述したが、爰には吾人獨特の火渡法を述べることにする。

先づ堅火を二三尺の幅に、一間半から二間の長さに積み、之に火を點じ、盛んに之を煽り、萬遍なく火の起りて、全部の炭が眞紅の色になつた時、一喝の氣合と共に、第三章に示したる所に従つて、之を渡るのである。

此の法は、何等第三章の夫れと異なる所ない様に見えるが、所謂行者なる者の、斷じて行ふことを得ない處なのである。

注意 (1) 第三章の注意をすべてこゝに引用する。(2) 炭の悉くが、眞赤になるを要する。尠くとも渡るべき場所に、黒き半點火の炭のなきを必要とする。(3) 充分に

火の起りたる後、板の如きものを以て、火を押へ、火面に凹凸のなき様にする  
ことは、至要なことである。第三章の注意にこれを缺いてあるが、彼の場合に  
も、此の注意を拂ふことは、誠によき事である。(4) 渡るには、オズ／＼しては  
不可ない。思ひきつて渡ると共に、足はや、叩きつけ氣味、即ち馬脚式に渡る  
ことに注意するがよい。

斯う書いてしまつて、餘りに此の篇はアツケない様であるが、予は妄りに神怪  
を説いて、世を欺くを好まないのである。全く赤裸々なる所に、眞の潜んで  
ることを、諸君が見出して、述べてあるまゝに行ひ、次第に深い研鑽と、工夫  
を積まれんことを、切に祈つてやまないのである。

### 中篇 不壞金剛篇

斯の篇に説く所は、上篇よりも更に多くの練磨を要する。全く上篇に説いた所は

予の注意の許に行へば、神妙の域には勿論至らないが、一見世俗の凡庸者を、驚か  
すに足る事が出来るのであるが、斯の篇の所述の、修養の如何に依つて、結果の上  
に非常の差異を生ずる。自然初學未修養の者は、難しい事もあるであらうが、夫れ  
だけ眼前に修養の程度を、實證的に見はされる譯であるから、修養練磨に、精の出  
る事と信するのである。どうか別篇に、示す所に依つて、充分の鍛練をして、至域  
に達せられんことを、切望して止まないものである。

### 第一章 一人よく數人を引く金剛力のこと

一人よく數人、いや數十人を引くと言へば、如何にも不思議に聞えるが、其の不  
思議が何の不思議もなく、誰にも行へるのであるから愈々不可思議千萬ではないか。  
此の不思議な法は、次の様な方式でやるのである。

先づ術者があつて、被術者の二三歩前に直立する。被術者は、唯だ丹田に力を藏

し、全身呼吸をなして、佇立するのである。被術者の後には、幾人でもよい、出来るだけ多くの人が、順次に腰を抱いて、前の人の前進を阻止する心算で、頑張つてゐるのである。準備は之で出来た。被術者の後に續く幾人幾十人は、皆一齊に被術者一人を、前進せしめまじとくひとめる。被術者は、虚心平氣で衝ツ立ツタまゝ、全身の力を丹田に込める。出来るなれば、次ぎに説く所の覺醒強直の状態になり、術者の心力の引くにまかせて、全身を次第に前に倒ふす。術者は「曳」と氣分を掛けながら、強大な心力を喚起して、被術者を引くのである。斯くすること、暫時にして全部の人が、次第に前から〜と前進し、初めるのを見るのである。

**注意** (1) 熟練すれば別に術者を要しない。被術者の位置にゐる人が、術者を心算の上で假念すればよい。(2) 被術者になる人が、全身を一直線にすることを、忘れてはいけない。(3) 被術者は、決してアセラズニ、よく落ちついて、靜かに前にたふれ、後の人の動き初めたのを感じてから、己が歩を起すべきである。

(4) 被術者を抱いてゐる人は、イキナリ後に引いてはイケない。唯だ被術者の前進を、クヒトメル心算で、抱きとめるのである。

## 第二章 小指にて鐵棒を曲げること

坊間、所謂香具師なる者が、柔道着を着し、汗みどろになつて、氣合術の本を賣ると稱して、此の法を修してゐる。大方の諸子は、既に承知のことと思ふが、順序として左に其の方法を説明して置く。

二分乃至二分五厘の直径を、限度とする程の太さの鐵棒を、左手に握り(右手利きの方)、右手の小指を、棒の他端に當て、徐ろに兩手に力を入れて、兩手と鐵棒の位置を定め、次ぎに腹力を充滿せしめ、精神を統一して、手に鐵棒のあることを忘れ、唯線香の如きもの、飴の棒の如きものを持ってりと觀念し、其の觀念の充分に出来たる刹那に、「曳」と一喝し、左手の小手首を、前方にかへし、右の手を、棒を曲

げる様に引くべし。

**注意** (1) 棒の太さは、各人の持ち力の大小に比例すべきものなり。唯此の方法の妙味は、普通にては曲げ得ぬ程度の太さを、容易に曲げ得るに在り。上述の太さは、日本人の平均體力を、基準にしたものである。(2) 棒は普通の鍛鐵なるを要する。鑄鐵、鋼鐵の類はよろこぶ可きものではない。彼の坊間に氣合士の鐵棒は、細さが上に、焼きをもどしたるものにて、殆んど何等の方法を講ずることなく、誰にも容易に曲げ得る程度のものである。(3) 長さは、扱ひ得る限り長さ方が、容易に曲げ得るのである。

### 第三章 指頭及び腕に金剛力を表はす法

拇指と、人指とを接して、圓き環を作り、充分腹力を充實せしめたる後、全身の力を指頭に集めたる後は、一切を忘れ、尠くも自己が指にて、環を作り居ることに

つきては、無關心の状態となりて、誰人かにこの指環を引き放たしむるに、遂に引き放ち得ないのである。此の際引き放たんとする力に、抵抗せんとするは、却つて容易に引き放たれるものである。

腕引の法は、よく角力連が力競への餘興に行ふ所であるが、臂の曲りに手拭の類を挟み、手掌を以つて頭を抱へ、手拭の引きくらするのである。此の際矢張り、腹力を充實し、全身の力を一旦臂に集めて、グット手拭を挟みて後は、一切之を忘れたる様な状態となり、身體を反對の方面に曲げて、臂を上げながら引けば、我に倍する敵に、容易に勝ち得るのである。

左右の臂にバンドを掛け、余は合掌し、バンドの兩端に、各二三人の人をかからしめて引かしむるに、若し彼にして別篇に説ける所に従つて、腹力を養ひ居らば、是等合計の五人の力に抗し得て、尙ほ餘裕があるのである。

此の際注意すべきことは、腹力を充實すること、合掌したる所に、全身の力を込

め、然かる後一切を忘れてゐればよいのである。

此の外首引き、指相撲、棒押し、腕相撲等、あらゆる力競べに於いて、少しく工夫を用ふるならば、常に己に倍する敵を、制することは容易である。

### 第四章 咽喉にて鐵棒を曲げる法

由來咽喉は、何人も非常に抵抗力の弱き、最も恐るべき急所と考へてゐる。成る程如何にも、急所には相違ないが、一面人間の身體は、決してそんなに意氣地なく出来てゐるものではない。人間の身體には、古來柔術家に依つて研究された、所謂急所なるものは無數にある。殆んど手のふるゝ所、皆之れ急所であると云つても、敢て過言ではない。夫れ程に多くの急所を有しながら、人間が無事に、平穩に生きて行ける事實に鑑みても、急所は方法を以つて當てる外、そんなに容易に、人間の生命をおびやかすものではない。大抵の所は、なかく、打つても、叩いても、容

易にマイルものでない。先づこの點を充分に承知した後、更に徐かに、自己の咽喉を押へて見るがよい。押へ様によつては、輕くムセルが、之に驚かないで、尙々徐かに、次第に力を入れて押して見ると、意外に其の力の強いのに驚く筈である。特に所謂ノドボトケより上の部の力強いことに就いては、まだ經驗しない人には、全く想像もつかない程、そんなに力強いものである。此の安心と、落付きの出來た時に、第二章に述べた、鐵棒又は之より、更に五厘位太い鐵棒をとり、靜かにノドに當てがひ、腹力の充實、精神の統一型の如くし、然かる後、一喝の氣合と共に、曲ければよいのである。

**注意** 初心の内は、ノドボトケより上に當てるがよいので、兩手で棒を押し上げる心地よりも、咽喉で棒を押し下げる氣持でやるがよい。

## 第五章 覺醒強直狀態

由來強直狀態と言ふのは、催眠術家の初めて使用した言葉であつて、第二度の催眠状態に於いて、一部肉體、又は全部肉體の筋肉が、一時硬化して、恰も鐵棒の如くなる状態を言ふのである。併し此の状態は、決して催眠術に依りて得られるのみでなく、寧ろ我が氣合術によれば、更に容易に、且つ好結果に、此の状態を得る事が出来るのである。催眠術に於いて、此の状態を作るには、可なりの手數と、時間とを要し、其の上、時に被術者の内臓を強直硬化せしめ、死亡の危険を冒かすことがあるのであるが、我が氣合術より得たものには、この虞が全然ないのである。

此の方法は、自分が自分でやる場合と、他人に對してやる場合とがある。自分でやるには、先づ型の如く腹力を充分に整へ、一部強直なれば、其の部に全身の力を集めたる後、一切を忘れてしまへばよいのである。又若し全身強直をやるとなれば、

ば、腹力の充實を圖つたまゝ、其のまゝ忘我の状態になれば、それでよいのである。今迄にも、所々に我を忘れると云つた意味なことを書いたが、是を示すには、別にむつかしいことはないのである。よく熟練したものは、唯『曳』の一喝で、忘我の状態となり得べく、未だ充分に練達してゐないものでも、二喝三喝乃至五六喝を用ふるならば、實に容易に忘我状態となるものである。

右全身強直が、果してうまくいつたかどうかを試み、表示するためには、頭脚の二ヶ所のみを支へて、體を仰臥させることに依ることになつてゐる。

右の状態が、催眠術の夫れと異つてゐる點は、強直してゐる人が、平生と少しも變らぬ心理状態にあること、筋肉があの時程に硬化しないで、よく其の状態を呈し得るの二點にある。

若し他人をして、此の状態を作らしめむとするには、別篇に示すところによつて充分に心身を鍛鍊した後でなくては駄目である。換言すれば、自己の精神を、よく

統一し得、以つて之を他に遷し得る底の修養を必要とし、腹力の充分なる充實によつて、何ものにも打ち克ち得る底の自信を要する。此の二要件さへ足りてゐるならば、別に何等の方法を講ずることなく、容易になし得ることを、自得する。

然しながら、強いて此の状態を作りたいならば、完全なものは望み得ないであらうけれども、近似のことは出来得るのである。其の方法としては、先づ被術者を仰臥せしめて、頭脚の二ヶ所を支へ、術者は片手又は両手を以て、臀部を支へたる後自己の腹力の充實を計り、氣合の充分に籠つた時、『曳』と一喝、又一喝すると、遂に手の支を取りのけても、決して姿勢を崩さないのである。

## 第六章 腹力金剛力法

第五章に述べた、自己覺醒強直状態の自由は、且つ完全に取れる様になつたならば、此の章に述べる所の法も、亦容易に行ひ得るのである。

先づ第一に試むべきことは、床上に仰臥し、腹力充實を行ひたる後、全身を柔らかにし、道家の所謂軟蘇觀を起して、充分全身の肉のどゞこほりなく、柔くなつた時、腹部の尤も柔かなる部分に、静かに人を一人載せて見るのである。而して徐かに、腹力の充實を圖るならば、左したる苦痛を感ずることもなく、腹上の人には、静かに何程か、全身を高く押し上げるゝのである。

右の試が了り、且つ容易であるならば、更に右と同じ心持ちと、同じ注意の下に二人の人を載せることを試むべきである。之も亦たやすく行ひ得たならば、更に三人にし、四人にして試むべきである。

吾人の實驗によると、相當に練熟した人は、大抵自己と同じ重量の人を、四人位までは、平氣でのせることが出来る様である。

注意 腹の上に上る人は、静かに上り、始終腹上に、静かに位置を保つことに、心掛けねばならぬ。

以上は床上に於いて之を行ふのであるが、首尾よく行ひ得た後は、第五章に示した所の如く、頭脚のみを支へて、而して此實驗をなすことが出来るのである。何等の疑念も、狐疑もすることは無い。唯信じて行へば、行ひ得るのである。但だ上るに場所がないから、自然或人は腹に、或人は胸に、或人は太腿部に、立つ可く餘儀ないと思ふ。

### 第七章 腹上にて餅を搗く法

腹上にて餅を搗かせ、某名力士が其のヒイキの客に、配つたと云ふことは、誠に珍らしい一つ話の様に傳へられてゐるか、腹上で餅を搗く位は、氣合の修業をした者には、全く容易に出来るのである。

其の方法としては、腹力の充實後、忘我の状態となりたる後、腹上に白を載せ、何人かをして搗かしむれば、それでよいのである。何等秘傳を要さないのである。

**注意** (1) 右の餅搗を行はうとするには、尠くも第六章の法を修して、三人を載せ得る程度に、心身の鍛錬されてゐる人でなくてはならない。(2) 白はなるだけ重きを、必要とするのである。決して拾貫以下の白を以て、此の實驗をなすべきではない。軽きときは危険極まるのである。(3) 心が白にとらはれ、杵にとらは

れてはならない。決して腹部に、又全部に力を入れて、ヨルべきではない。腹部に力を入れることは、却つて失敗の原因と考へねばならぬ。

### 第八章 玄翁にて腹上の三四十貫の青石を割らしむ法

只題目さへ掲げれば、直に其の法は會得される程に、そんなに容易な法である。前述の修養と、實驗を経た方には、唯青石の三四十貫もあるものを、腹上に載せ人をして玄翁を以つて打ち割らしむればよいのである。



**注意** (1)石は可及的重い方が、却つて樂であり、而も他に對して、見榮えのあるものである。(2)大抵は心配ないが、種仕掛のないことを示すために、裸で之を行ふことになつてゐるが。石が二つに、三つに碎けた際、わるくすると、其の小破片に依つて、皮を傷けることがないとも限らないから、豫め之に備へるために、腹と石との間に、厚い板など挟むがよい。

前章に書いた所を、其のまゝ腹の上でなく、胸で、又は横腹等で行ふものもあるが、要は全く同じである。

本篇及前篇等に説く所、誠に奇に走り、實に篇名の如く、神奇をてらふに似たりと雖も、述者の意は決して此所に存するにはあらずして余は之に依つて、世を欺くの具に供せるものがあるが故に、諸子をして之に備へしむると共に、一面諸子の心身を、充分に鍛鍊せしめ置き、對自己、對他人の病氣治療に、奏効の

容易、確實を期せんがために他ならぬ。

下篇にとく所、聊か餘興じみたるも亦之に依つて先づ世人に、偉大なる能力を有するものなりとの暗示を與へ、斯くて治療及び惡癖矯正に効果あらしめんとするにあり。

## 下篇 雜錄篇

### 第一章 面上に落下し來る石を杖にて必ず

#### 受け止むる法

小石を抛り上げて、之を竿杖の類にて受け止むるに、百發百中、遂に一度も仕損することなき巧妙さを嘆ずるものを、よく縁日などにて見るのであるが、之は少しも不思議はないのである。持てる竿、又は杖を鼻梁に添へて持ち、落ち來る石の眞

下に立ちて、之お受け止むれば夫れでよいのである。初めの者には、時に仕損じがあるかもしれないが、三度五度と練習を積むに従つて、實に百發百中、千發千中、一の失敗もなき面白さを味ひ得るのである。

### 第二章 黑白碁の打ち分け

有名なる劍客、佐々木巖柳が、己に向つて投げつける碁石を、悉く受けとめしのみか、黑白を左右にうちわけた話は、宮本武藏が、同人に對する復讐美譚と共に、武人の間に三嘆措かざる不朽の名譽とされてゐるのであるが、若し別章所載の六法に依つて、充分の練習をして、眼と精神が練熟されたならば、必ずや、巖柳を待たないで、誰人にも容易に出来る、藝當なのではあるまいか。

### 第三章 兩端を一枚の紙にて吊したる青竹

#### を打折りて紙のきれぎる法

右の法もよく祭り、縁日等に於いて、香具師に依つて行はれ、餘り事新しいことではないが、尙不思議がる方も多から、序ながら筆にすることにしました。方法としては、青竹又は木の枝の類の兩端を、細き紙捻、又は細き糸、又は一枚の稍強靱なる紙に、穴を穿ちたるものにて吊し、木刀或は刀を以つて、吊されたるものの真中を打ち切れば、紙又は糸は切れることなくして、枝、竹は折られるのである。

注意 (1)吊されたる枝、又は竹の太さ、強靱の度は、其の人の技量と、比例すべきである。彼の香具師の用ふるものは、一年竹である。(2)以上の枝又は竹の真中に、豫め目印を附けて置いて、此の所を打たねば駄目である。何れか、打つ場所が一方に偏すると、吊りは、必ず其の偏した方が切れるに定まつてゐる。

(3) 打つことは出来るだけ、正確に急激でなくてはならない。此の打ち方が緩慢であれば、あるだけ吊の方が切れ易くなるのである。而して急激に、正確に打つためには、打つこと夫れ自身の練習も必要であるが、充分腹力の充實を圖り忘我の状態で一氣に打ち切るべきである。此の呼吸さへ充分に出来るなれば、竹の太さも、問題でなく、三年竹であらうが、五年竹であらうが、全く問題ではないのである。

古來劍士の間に傳はつてゐる、カメラワリの極意なるものも、畢竟は腹力充實、氣海に充滿した英氣の、一氣に發するを言ふのに外ならぬのである。

彼の柳生の三男が、修業中練習したと云ふ、流れ切り、瀑布の水切の極意なるものも、對象に剛柔の差はあるが、呼吸は全く同一のものである。

吊に用ふる紙片に代ゆるに、水を満てたる茶碗を以て、其の上に竹を置きて打ち切るも、矢張り同理であつて、水は一滴もこぼれることはないのである。

#### 第四章 金魚に氣合をかける法

氣合を他の動物に掛ける第一歩として、金魚を其の對象とするのが尤も簡便な様である。

それには、先づ鉢に三四匹の金魚を取り來りて、我が前に置き、己が姿勢をと、のへたる後、充分に腹力の充實を圖り、氣海に英氣の充滿するを待ち、一氣に之を發して、氣合を掛ければよいのである。

氣合を謀り、氣の充實を圖る間、金魚に對して精氣の集注することを忘れてはいけない。精氣の集注のよくされたもの程、早く氣合にかゝる様である。

注意 氣合がかゝりたりや否は、金魚の態度を見れば明かである。若しかゝりたりとすれば、今迄元氣に活動せしものが、急に鱗を收め、靜に鉢底に下りて生死が明らかならざる程になるを見るべし。

此の練習を積むに随つて、他の動物にかくる工合も、自得されるに至るのである。

### 第五章 鶏に氣合をかける法

第一法 鶏を捉へ來り、之を仰臥せしめ、靜かに胸毛をなせ下げ、鶏の氣の沈靜したる頃を見計ひ、靜かに強き氣合を掛くる時は、鶏は冥目して、靜かに眼を見ないのである。

注意 (1)他人の前に之を行ふ時の如きは、先づ氣合をかけんとする前、鶏の氣を荒くしてさわがさしめる様に、仕向けることが大切である。(2)イザかける準備として、抱き上げては脊を靜かに撫せ、鶏の氣を落付かしめ、其の落付くを待ちて仰臥せしめ、更に前述の方法をとるべきである。  
覺まさしめるには、何等手をふれることを必要としない。強烈なる氣合一喝をく

れれば、夫れで澤山である。萬一、一喝で覺めない時は、二喝、三喝をくれればよい。

第三法 之は催眠家の常用方法であるが、氣を以て眠らせる點は、同じであるから書いて置く、夫れは、前記の如くさわく雞を捉へ來り、脊を撫でて氣を靜めしめ首と兩足を伸ばす様にして、體を床に壓しつけ、兩眼の所より前方に、白色の線を引き、靜かに氣合をかけると、鶏は立所にねむるのである。

覺ますには、やはり、單なる喝にて足りるのである。

第三法 前述の如く、躁げる雞を捉へ來り、之を椅子の如きものの上に止まらせ體を靜に押へ、脊をなせ、氣を靜かにせしめ、雞の態度をして、普通の眠りの状態をとらしめたる後、靜かに且つ力のこもれる氣合をかけると、鶏は其のまゝ眠る。覺ます法は、前記の方法と變りはない。

## 第六章 烏を集散せしむる法

世界無銭旅行を遂げ、途中土耳其で軍事探偵と間違へられ、死刑の宣告迄もうけたと云ふ、冒険旅行家であり、且つ朝鮮、支那、ビルマ、印度に於いても、諸種の難行苦行をしたと云ふ精神家である、吳貨將軍、中村泰昌氏が、最も得意に此の法を修するのであつて、嘗つては江間俊一氏と、諸種靈理、靈學上の話の末、實驗と云ふ段になり、上野の森の烏を一所に集めて、ヤカマシク鳴かせたことは、東都に於ける靈學者、靈能者間に、公知の事實なのである。

事實を話に聞けば、誠に神怪な感があるのであるが、決して何等の神怪、奇異は其の間に介在しないのである。要は多年の山居の間に、充分に禽獸の鳴き聲を研究し、巧妙に之を真似、以つて彼等をして、彼等の仲間間に存する、不文の約束に従つて、集散せしめるにすぎないのである。

彼の小鳥とり、蟲とりの人達が、笛によつて巧に彼等の聲にまねて、彼等呼び出して、捕ふることに考へ至つたならば、思ひ半に過ぐるの感があるのである。

## 第七章 自働書記

自働書記と云ふのは、原名プランセットの譯語である。今から十餘年前、亞米利加から舶來して、一時非常な大流行を極めたもので、一言にして言へば、心理學、靈理學の實驗用具なのである。夫れを、夫等に對して、餘り多くの理解を有たぬ者までが、流行を追ふて、猫も杓子も盛にやつたため、果ては所期の十分の一の結果をも見ないために、遂に今日すたれてしまつたのであるが、決して見捨つ可き者でなく、充分の研究をとぐ可きものであるから、構造と用法を示して、諸子の研鑽の一資に供したいと考へるのである。

構造は、吾人の手掌を載するに足る程の、大さのハート形の木板で、厚さ三四分

位のもの尖端の方に穴を穿ち、鉛筆を保持し得る様に装置し、ハートの兩心耳に相當する所に、縦横に廻轉するに都合よき様に、作られたる車を装置すれば、夫れでよいのである。此の車の代りに、極簡単に造れば、墨表を止める紙の如き、背の滑らかなるものを打ちつけてもよい。

第一、使用。右の如くに作られたるブランセットを、白紙の上に置き、ブランセットの上に、右手或は両手を安んじ、冥目、端座、無念無想の境に入れば、心にはんとする所のものを藏するものは、暫くにして、ブ氏の活動するあるを見るのである。かくてブ氏の活動するがまゝにまかせて、手をひきすられ行く中に、ブ氏は何時しか活動を停止する。此の時に於いて、開目し、ブ氏が一筆書きにしたる所を、注意して見れば、或は右文字に、或は左文字に、或は異國語に、或は繪畫に依つて、其の間に對する答を、記してあると稱せられてゐる。併しながら多數の實驗の結果によると、其の實驗場にある人々の集合心理の作用に依るか、將たブ氏

に手を置きたる人の精神統一の状態の如何によるかは、不明であるが、ブ氏が全然働かないこともあれば、答が間に對しては、餘りにトンチンカンなこともあり、全く無意義なこともあり、或は全く不明なこともあると言はれてゐる。

併し、また正確に明瞭に答へ、而も中した事例も尠くないのである。予の友人中川清風氏の如きは、第二、使用法に依り、極不完全なるブ氏を、使用してよく的確に中つた、幾多の事例を持つ實驗者の一人であつて、ブ氏崇持者の一人である。

第二使用法。此の法は、第一使用法とは、餘程趣を異にするのであつて、ブ氏の上に、右手を安んじ、忘我の境になるまで、精神を統一し、所謂無念無想、心は明鏡止水の如くなりたる時、我より心して手を縦横に働かす。ブ氏は手に従つて縦横に運動すべし。其運動の盛んなるにつれ、己が問はんと欲したる所に對する答は、觀念の上に顯はれるのである。

## 第八章 狐狗狸術及降神術

自分は前章に於いて、プランセットの事實に關して記したが、何等原理を説くことをしなかつた。併し、予は全篇を通じて、理論を玩ぶことを避けたから、矢張此所でも之を説明することを止める。此のプランセットと同一原理の上に立つものに所謂狐狗狸術、降神術なるものがある。前者は、三本の細き棒の中段を縛し、之を擴げて足とし、盆を裏返しにして、此の上に被せ、此のダラ／＼と動き易きもの、上に、幾人かの手が隻手、又は雙手を載せ、各人が、同一問題に對して、思念しながら冥目し居れば、初め定め置きたる約束に従つて、盆は左轉又は右轉して、其の間を正確に答へるのである。例へば、今來客あり、其の男なりや女なりやを、狐狗狸さんに問はんとするに、男ならば左轉、女ならば右轉と約束し置き、各人冥目思念して、狐狗狸さんの廻轉をまちて、答とするが如きである。

其答のや、複雑なるものに至りては、之を分解して然か否かに分ち定て行く。

後者即ち降神術には、所謂巫子なる者を頼み、彼自身が專念祈禱することに依り其の間に忘我脱境の神境に住するに至り、自發的に依頼者の問はんとする所に答ふるか。幾人かの内にて、一人を撰び出し、他の人は之を取りまきて、頻りに經文などよみ立て、一心に祈る内に、何時か中央なる人は、脱塵無我の境に遊ぶに至るのである。此時一同は、經文を止め、夫々各自が問はんとする所を尋ぬるに、地の東西、時の過去、現在、未來のきらひなく、輕快に應答を與へるのである。但し時に其の答の要領を得ざることあるのは、第七章に述べた所の如くである。

後の方法は、法華の行者、特に中山派の者などが、好んで用ひ、以て佛經讚嘆の資としてゐるのであるが、必ずしも經文の力をかる必要はない、「曳、々、々」と氣合を掛け通すも可なり。勅語を拜讀するも可なり。「呵、江、以、字」何れの氣合を連續的にかけるも可なりである。

### 第九章 靈子板

靈子板なるものは、田中守平氏の考案になるもので、同氏の斬定は、檜材の板を縦七寸、横四寸、厚五分として、兩面を最も滑かに削り、板の周圍を半圓形に爲し、且つ周角の全部に面を取つたもので、兩面に澁、ワニス、漆の類を塗ると否かは、各人の好みにまかせてあるが、白木のまゝを、寧ろよろこんでゐる様である。同氏は此の板を、所謂靈子潛動作用を修得し、治病能力を増進するの具に供してゐる。此の實驗をなし、練習を積むことに依つて、所謂潛動作用の體得よりも、脱境、超我、心身合一の境に入りやすからしめる、渺くとも免かく散亂、散漫になり易き氣力をまごめる上に、非常に興味ある練習方法なる點に於いて之を探り、心力氣力をまとめる力ある點に於いて、治病能力増進法の一として讚し、其の形式の奇なる點に於いて、此の篇の中に入れたのである。(第七神奇篇終)

## 科外講話 活社會應用 靈動氣合術 成功秘訣篇

大日本靈學通信學校講師講述

### 緒論

本講に於て述ぶる所は、一つとして氣合術の應用でないものはない。併しながら何れも治病其の他特殊の目的のためにとるべき方法を講述し、或は之に要する諸種の用意、説いた所であるが、此所には日常生活に際し、起り來る萬般のものに對して施すべき應用方法を示し、且つ各人が各自に工夫自得する様暗示を與へ度いと思ふのである。



氣合術に於いてのみならず、百般の事に當つて、自己が囚れると言ふことは、事物の進行を阻害し、圓滿なる進開發展を害し、結局自己の所求目的を實質の上に貫徹すること能はざるに至るのであるから、注意すべきである、常に大局に着眼して終始すべく、目前瞬間の成敗に眼を奪はれ心を囚はれるべきでない。

對人的諸種の行動に於いて、對手より遠大なる着眼をなす場合に、常に氣合の旺盛なるを得て、必ず終局に於いて勝利を得べきである。

加減の算法を以つて、普通の論理を以つて押せば、一小部の勝利を積んで全局の勝利であるべきであるが、世事は萬事複雑であつて、其の間に乗除もあれば負数の計算もあり、更に器及器根並に之が負數計算等があつて、此の單純なる計算が全局に於いて正鶴を得ない場合が多いのである。

此の理は彼圍碁及び將碁の如き戯技に於いて、なほよく最も明かにするを得るのである。

一石一駒の生死にのみ腐心して、大局を見ざる者は、否一石一駒に囚はるゝが故に、大局を見ることが得ざる者は、常に全局を遂観して、一石一駒の生死は其の上判断を下し、決して之に囚はれざる者に勝つを得ないのである。

氣合の玄理妙法は蓋し此の間に存する。

### 第一講

予一日我が友の銅鐵商を營める者の家に遊んだ、偶一客の來る在りて多額の銅の注文を發して去つた。店の貯藏品は非常に手薄で、到底其の注文に應ずべくもなかつたのであるが、數日前在神戸の同種商人より銅板ストック品の賣り道の有無を問合されたことのおつたのを思ひ出し、之を唯一の頼として右の注文を受けることになつた。

客の去るや否や番頭は主人に神戸に向け電報で注文を發す可きやを尋ねた。實際

客の註文の本旨からすれば神戸になほ品物の有りや無しやを尋ね、若し賣切れた後であつたならば、更に至急に必死となつて他を漁る必要があつたのであるが、之に對して主人の未だ答を發せざる内に、他の番頭は電報よりも書留の郵便にて問合す方の有利なることを主張した、主人はなほ黙々としてゐたが、やがて一葉の端書を取つて、前略過般一寸御話有之候銅板、今も御持相成居候はゞ、價格の如何に依りては御引受申度、右御照會申上候拜具」と云つた様な意味に認めて小僧に投函させ

た。  
而して書留よりも、葉書の方が先方へ届くことが早く、而も對手に當方の必要に迫れる様子を悟らしめない上に於いて、最も有利であるだらうと言つて笑つた。  
予は此の襟度に對して主人の氣合法を商道の上に応用せることの敏なるに驚いたのであつた。

## 第二講

予が或る夜神田の駿河臺下に某講演を聴いた時であつた、聴衆の中に眞面目なる講演に對し、輕卒なる彌次を發したものがあつた爲めに、聴衆がイキナリ騒ぎ初めた。餘りの騒々しさに講演は衆に徹しなくなつた。演者は呆然として立つの外はなかつた。

十秒、二十秒、騒擾は續いて次第に甚しくならうとした。刹那、演者は最大最高の聲を發して「諸君」と喚鳴つた、大衆は瞬間其の騒擾を止めた、演者は語をつ

けた。  
御安神下さい、私は彼等に彌次られて論旨を亂すものではありません。彼は私を稽古臺にして、彌次の練習に来てゐるのですと、聴衆はもとの靜寂に復つた。再び彌次を聞くことなくして講演は滑かに進んだ。

此の演者が『諸君』と最大の努力を以つて嘖鳴つたことが、氣合法の本義に適つてゐる。更に安心せよと一語を與へて、衆を押へ、彌次の稽古なりと相手をミクビリたる所に、更に巧妙なる氣合法の應用を見るのである。

### 第三講

或る政談演説會の時であつた。反對黨から派遣された彌次連の彌次は次第に其の度を加へて來て、殆んど論旨を徹底せしめない程度に達した。

吾が友は演壇に上らんとするに先つて予に耳打をした。友の演説の次第に進むに従つて、妨害の彌次の度は益々加はつて來た。

突然壇下より、二人の壯漢が顯はれて、演者を壇より引き下ろさうとした、政友の者が馳けつけて之を救はんとする刹那、演者は場も裂けよと大喝一聲『曳』と發する氣合と共に、二人の壯漢を見事に投げ附けた。

場内は此の意外の出來事の爲めに呆然として無人の如き靜寂に返つた。二壯漢は再び立ちかゝる元氣もたたく蒼惶として逃げ去つた。場内は矢張寂然たるものであつた。友は泰然として更に其の論旨をつづけた。

反對黨の壯士連は、遂に氣を吞まれて再び友の演説を妨害することはなかつた。因に記して置くが、壇上にをどり上つた二壯漢は、予が命を含んで立ちかゝつたもので、全くは八百長でやつた藝當なのである。

前講も、本講も共に演説の彌次防ぎに使用された氣合術であるが、何れも剛を以つて剛を制したものである。

若し未だ演題に立たざるに、既に場内喧囂到底其の演説をなし得ざるが如き場合に際しては、先づ味方の者を場内相當なる場所に配し、然かる後演壇の一隅に立つて諸君の大度に信頼して、諸君が二分間に演説を許して下さることを懇願すると云つた様なことを云ひ、先きの味方のものが口々に『よし』とか、『二分間だ』とか

至極簡單に強く許可の思想を發表すると、衆は演者の柔に制せられて其の剛をやわらげ、味方の者が發したる許可に暗示されて靜寂になり其の儘演説をつゞくること  
が出来る様な場合もあるのである。

### 第四講

他人に對して物事を依頼懇願せんとするが如き場合には、之を夜間に訪問するが如きは避くべきであつて、相手の迷惑にならざる限り、午前中早く訪問する方が有利で、且つ纏りが早いものである。

更に立談よりは、座談を尊び、共に食事しながら話すが如きは誠に妙である。  
若し相手と懇親を圖らんとするが如き訪問ならば、特に夜間を撰ぶ方が有利である。同じ夜間であつても、土曜日の如き相手の心の全く落ち着く日を撰ぶがよい。  
人の心を囚ふるには、其の子供の心を囚ふるが最も妙である。子供のなきものに

向つては、其の婦の心を囚ふ可きである。未だ婦のなき者に對して、直接本人に讚嘆の辭を捧げるよりは、所謂壁訴訟を用ふ可きである。即ち本人に傳承せらるべき人に對して、本人に讚頌を奉るべきである。唯對手が婦人なる場合は、其の度の甚しからざる限り、當人に讚嘆の辭を捧呈するが尤も有効である。

### 第五講

門前拂をせらるゝ場合に、主人に面會する方法は二つある。一つは逢ひさへすれば夫れで用の足りる時、又は充分に對手を征服し、自己の欲する所に從はしめる自信のある場合、換言すれば對手の心持の如何を念とせざる場合に用ふ可きものであつて、玄關にかゝつて案内を請ひ、取次の者に對して名刺を出しながら、主人とは約束で参りましたが御在宅でせうかと云つた様な要領、又は一寸御見掛して御在宅の様子でしたので御上りしましたと云ふ様に取次の者の口占を引いて、彼に在宅の

言責を負はしむる様にする場合と、今一つは所謂根によつて對手を征服する方法であつて、名刺の端に用件の大様と訪問の年月日及第何回なりや」を認め、玄關にかゝつて取次の者に御在宅で御差支がなければ、十分許り御邪魔がいたし度う御座います」と取り次がしむるが如き方法に出で、性こりなく之を繰り返せば大抵は如何なる者に對しても其の目的を達し得るものである。

## 第六講

本講に於いては、氣合法の應用に依りて危難から逃れる方法を記さう。

(1) 古來柔道の極意に適當なるものが傳へられてゐる、秘傳中の秘傳視されたもの皆傳與傳のものでなければ之を傳へられなかつたものであるが、要を聞けば左の如きものである。細心の注意の下に應用すれば、身を危難から脱することは實に易々たるものである。

實に氣合術の玄妙なる點を具體化したものであると信じてゐるのである。己が未だ其の尊さを理解するの程度に至らずして、其の方法の餘り容易なるに驚いて、其の眞價を疑はざる様注意すべきである。總て如何なる秘事も聞いて見れば餘りに手近で、簡單で、平凡なものである。併しこの平凡事を平凡事せざるに至つて、其人は初めて至人たることを得るのである。

而して逃難の方法とは對手と相對して、互に氣合を計れる刹那、唾を對手の面上に吐きかけ、對手の氣の之が爲めに碎け崩れたるすきに乗じ、或はのがれ或は他の手段を講ずることである。

(1) 白及又は棍棒或は雜棒の類を打ち振つて吾を打たんとする場合に、其の對手との間合を考へ相手との距離既に六尺以内なる時は、普通の場合に其の打撃をのがれ得ざるものである。劍家の秘傳に皮を切らせて肉を切り、肉を切らせて骨を切るとあり。また「振り上げし、太刀の下こそ地獄なれ、一足すゝめあとは極樂」とも

ある。

斯かる場合には左前臂で前額を蔽ひながら、一足敵の懐に踏み込んで、飛ちがひ様に右の臂關節を以つて相手右脾腹、即ち乳下の部に強烈なる突撃をくれてやるべきである。

當身の極意は後の先を制せよと云ふのであるが、之は専門の語であり、呼吸の關係も複雑であるから、其の説明は略するが、此の要領でやれば自然に此の極意に適ふ譯なのであるから、安心してやるべきである。

なほ左前臂に萬一切り附けらるゝ様のことありとも、右の如き場合には如何なる劍客の腕を以つてしても、なほ骨を切り得ざることとは千年間の我が武術の研究が實證する所であるから、安心してやるべきである。

## 第七講

予は先きに忍術の極意も、畢竟は氣合術の應用なることを説いた。予の知れる蕘屋に此の忍術の極意の虚實法を商賣に應用し、意外の利を占めた者がある。左に其の大様を書かう。

彼の蕘屋のショーウキンドには、奇妙な飾りが置かれてあつた、夫れは可愛い、狎と彼の食器として與へられたる高價の青磁の茶碗とであつた。

道行く人の中には、之に對して全く無關心なものも居た。併し其の多くはこの珍な飾りに對して一步を止むることを惜しまなかつた。立ち止まつた者の中には其儘行きすぎるものもあつたが、中には犬すきのももあり、青磁の茶碗に目をつけるものもあつて、中に這入り蕘を買ひ求めながらこの珍裝飾の話をした。

多くの客の中にはこの青磁の茶碗、又は狎に愛欲の念を留めてツイ何回となく來る者が出來た。

店主と次第に馴染の深くなるにつれ、話は自然と其の欲する所にかたむいて行く。

遂に兩人の間に之が譲り渡しの話が始まる様になつた。夫れは犬だけでなく、茶碗だけでなく、両者が多年結びついてゐたことを理由として、店主の發言にまかせて両者が同時にであつた。

言ふ迄もなく、青磁の茶碗で飯を食ふた仲の値段は、随分高價なものであつた。彼がこの賣買の成功を見る迄に、其れは多くの交渉の失敗を見たことは事實であるが、其の間彼は之に依つて多くの客を引いた點に於いて、何等の損失さへなかつた。寧ろ此の珍飾りが、呼ぶ客の数は如何なる窓飾をするよりも有効であつた。

## 第八講

吾人が企てた應用氣合術も將につきんとする。前七講に依つて予が何を言はんとしたかを、諸君はよく諒解してくれたことと思ふ。

あと二講は日常生活の身體方面のことについて述べよう。

都をば霞と共に出でし法師、毎日炎天に顔をやいて、如何にも白川の關邊りまで行く様に装ふたのは、誠に文壇の好逸話であるが、穢屋に自から封じ込んで、毎日の炎天に身體を焼いて、避暑海水浴を装ふは如何にも悲哀の極である。

輕薄なる連中が、避暑避暑を装ふ氣の毒さもさることながら、地球上の最好地點に居を占めながら、更に避暑避暑をせざれば身體を保持して行くことが出来ないに至つては笑止の限りではないか。

若し國民の悉くが斯様なものとなり、或は之を装うて以つて得々たるに至らんか實に邦家の前途は暗々たるものであらねばならぬ。

赤道直下兩極地方の極暑極寒に堪へてこそ、堪へ得る力があつてこそ、如何なる仕事にも耐へ、外人の遂に至り得ざる所にも新天地を開拓して、邦家及び自個の發展を期することが出来るのではあるまいか。

地を替へて寒暑を避くるよりも、同じ地に住して依然仕事をつづけながら、而も

寒暑を苦痛と感ぜざるが如き身體を造ることの、如何に賢明な方法であるかは言ふをまたないのである。

而も其の方法や全く簡単なものである。

世人はなほ乃木式炬燵なるものを記憶してゐるであらう。彼の炬燵は實に重寶なものであつて、夏は其の儘氷室の變りをするものである。

寒暑は遊惰の者に對して最も強く感じ、働けるものに對して最も感が鈍いのである。天の配劑は誠に至妙に出來てゐるのである。

予が主張する方法は、此の理に基き、更に心身の一切調和を期し得らるべき方法と、乃木式炬燵を兼ねたるものとして、別篇所掲の靈動法を推奨するのである。

若し夫れ之を行はんとするものは、毎晨四時乃至五時に床を出で、直ちに口をすゞぎ、正座又は正立して靈動を發し、飛動すること五十乃至百。次いで腹式呼吸を行ひ、腹力の充實を計り、雄健雄語を行ひ、更に氣息を止めて圓融法を行ふのであ

る。耐寒の方法として足心呼吸（踵式呼吸）を之に附加するもよい。

右の方法に依れば心身の調和を得て、寒暑を共に苦痛として感ぜざるに至るのである。

別篇所述に従つて冷水浴を行ふものの如きは、此の方法を行ひたる後にせんか、如何なる極寒にも無量無限の快を覺ゆべきである。

### 第九講

本講は振氣回精の方法に就いて述べんとするのである。人生の一切は其の精力が根本となつて爲しとげられるものである。大凡如何なる物も（假に物心を別なりと見て）其れ相應に或る特殊の力に依つて結合統一されて、夫々の用をなしてゐるのである。例之人體に於いても生命と云ふ不可思議物に依つて、統一結合されて、人間としての存在があるのであるが、一度生命が身體より去つたならば、三十幾つの



元素に歸つて他の無機物的存在に等しくなるのである。又此所に一本の木材ありとするも、ある力の存在する限り堅牢なる木材たるを得るのであるが、一度風雨に依つて此の力の奪ひ去られんか、其の材質は崩壊するのである。

斯く精氣は一切の本源である。陽氣の發する所金石亦徹るのである。世に立ちて事を爲さんとするものは、其の靈氣を振起して中心勢力結合統一の力となり、以つて事を成就せしむべきである。

更に靈氣も、陽氣も、精氣も、元氣も、心力も、一つに心身の合致したる一如の境から發する力である、既に力である以上使用によつて消耗される。力は身より移轉して他に移り、其所に新しき力となつて、或は物を結合せしめ、或は既存のものに更に力を加へて、其の存在をヨリ力強からしめる、従つて精力は耗弱する。此所に於いてか之を回復せしめるの要を見るのである。然らば其の方法や如何と言ふに唯一つの靈動法があるのである。

振氣の法としては毎旦に之を行ふて其の徳を收むべく、更に時に臨んでは彼の圓融、無碍、交感、靈通の妙法に依つて、宇宙の大本靈と參差、交錯、交感して其分靈の氣の益々旺盛ならんことを圖るべし、消費消耗したる英氣の回歸法としては、毎夜其の寢に就かんとするの時、靈動法並に圓融法を行ひて精を補ひ回復すべきである。

肥大になやみ、瘦瘠に惱める人の如きは、如上に従つて之を毎風夜に行はんか、數句を出でずして元氣横溢、しかも身は中肉なるを得て、天與の樂を此の人生に受くるを得るのである。

科外講話 活社會應用 成功秘訣篇 終り

大正十二年五月五日印刷  
大正十二年五月十日發行  
大正十三年十一月二十日改訂三版  
昭和三年五月廿日改訂四版

非賣品

不許  
複製

編輯人 桂 六十郎

印刷人 高橋 利惣次

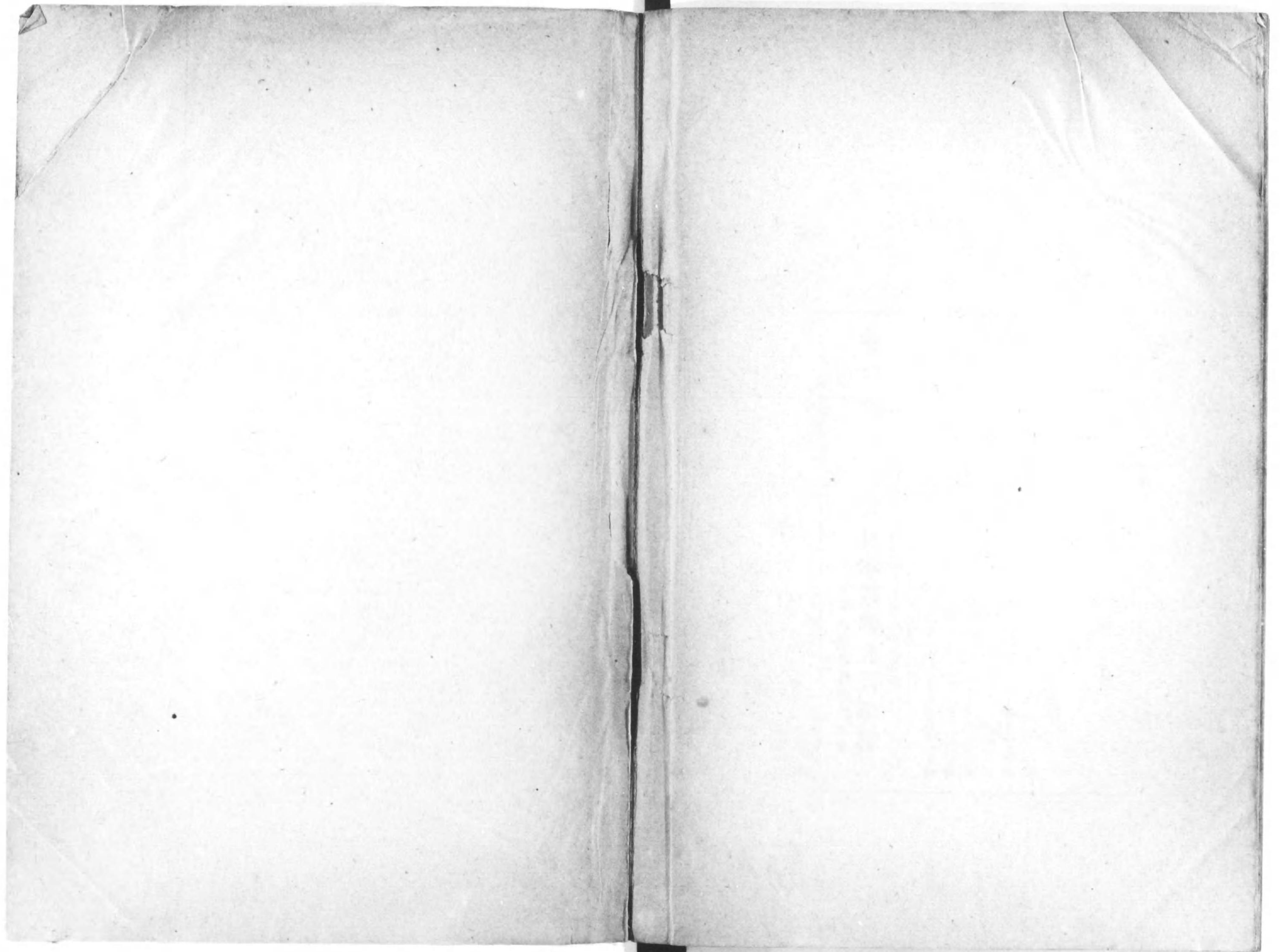
印刷所 高正堂印刷所  
東京府下北豐嶋郡高田町雜司ヶ谷九百九十九番地  
東京市小石川區指ヶ谷町十二番地  
東京市小石川區指ヶ谷町十二番地

東京市外高田町雜司ヶ谷九四九番地

發行所

大日本靈學通信學校

振替東京五八四七九番



爾なんぢに還かへれ

爾なんぢは陛下かみか下の赤子あかこなり

爾なんぢは自然しぜんの愛兒あいじなり

日ひと氣きと土つちとに親したしみて

爾なんぢの自然しぜんに還かへれかし

雨に還れ

雨は陸下の赤子なり

雨は自然の愛兒なり

日と氣と土とに親みて

雨の自然に還れかし

終